

筑波大学電子図書館システムの新しい機能とデザイン

宇陀則彦¹⁾、落合陽一²⁾、廣瀬怜那³⁾、小野永貴¹⁾、
徳田聖子⁴⁾、金藤伴成⁴⁾、斎藤未夏⁴⁾、嶋田晋⁴⁾、
平田完⁴⁾、大曾根美奈⁴⁾、真中孝行⁴⁾、歳森敦¹⁾

¹⁾ 筑波大学大学院 図書館情報メディア研究科 ²⁾ 筑波大学 情報メディア創成学類
³⁾ 筑波大学 図書館情報専門学群 ⁴⁾ 筑波大学 附属図書館

概要

筑波大学電子図書館システムは2010年3月1日にシステム更新を行った。2010年システムは、「簡単にすばやく」を目標とし、a) 文献へ最短距離で到達, b) データベース一覧機能の改善, c) ウィジェット環境の導入, d) わかりやすいデザインを具体的課題と位置づけた。本稿では新システムの機能とデザインについて説明する。

New Functions and Design of Tsukuba University Library Information Processing Systems (*TULIPS*)

Norihiko UDA¹⁾, Yoichi OCHIAI²⁾, Reina HIROSE³⁾, Haruki ONO¹⁾,
Seiko TOKUDA⁴⁾, Tomonari KINTO⁴⁾, Mika SAITO⁴⁾, Susumu SHIMADA⁴⁾,
Kan HIRATA⁴⁾, Mina OZONE⁴⁾, Takayuki MANAKA⁴⁾ and Atsushi TOSHIMORI¹⁾

¹⁾ Graduate School of Library, Information, and Media Studies, University of Tsukuba
²⁾ College of Media Arts, Science and Technology, University of Tsukuba
³⁾ School of Library and Information Science, University of Tsukuba
⁴⁾ University of Tsukuba Library

Abstract

This paper describes new functions of design of the Tsukuba University Library Information Processing Systems (*TULIPS*). The *TULIPS* was replaced at March 1st, 2010. The goal of new *TULIPS* is to realize a simple and quick system. Main tasks are as follows: a) to access a document via the quickest path, b) to improve a view of database list, c) to introduce widgets environment, d) to design the interface more easily understood.

1. はじめに

筑波大学電子図書館システムが2010年3月1日に新しいシステムになった。2006年3月以来4年ぶりの更新である。本稿では、2006年システムで得た知見を踏まえ、新たに設

計した新システムの機能とデザインについて説明する。

2006年システムは学術情報ポータルをコンセプトとし、電子情報資源の提供を前面に出したシステムであった。ポータル型ということで、図書館が利用者に提供すべきだと判断した全ての情報資源をトップページに一覧として配置し、図書館のサイトにアクセスすれば即、情報資源にアクセスできるようにした。また、2002年頃から欧米の大学図書館で急速に普及しつつあったEx Libris社の横断検索システムMetalibとリンクシステムSFXを導入し、数十の情報資源を一度に検索し、検索結果から論文本体へナビゲートすることを可能にした。さらに、文献管理システムRefWorksを導入し、個人ごとに文献を管理できるようにした。

このように2006年システムはそれ以前のシステムに比べると、機能が飛躍的に向上したが、利用者の反応は芳しいものではなかった。まず目玉であるはずの横断検索が期待どおりに動かず、ほとんど利用されなかった。また、リンクシステムによって情報資源が相互にリンクされたものの、操作が複雑でうまく文献に到達できない利用者がいた。さらに、トップページに配置したデータベース一覧は情報資源を見つけにくく、利用者ごとにカスタマイズできないという欠点があった。さらに全体の印象として何をすればよいのかわからないという指摘が多々あり、わかりにくいデザインであることが明らかになった。そこで今回の2010年システムは、Simple and Quick（簡単にすばやく）を目標とし、a) 文献へ最短距離で到達、b) データベース一覧機能の改善、c) ウィジェット環境の導入、d) わかりやすいデザインを具体的課題と位置づけた。

2. 新システムの機能とデザイン

文献へ最短距離で到達

文献へ最短距離で到達とは、検索結果からワンクリックで論文本体にアクセスできることを指す。Googleなどのサーチエンジンでは普通のことであるが、OPACやデータベースにおいてワンクリックアクセスを実現しているものは極めて少ない。大抵プログラムの都合としか思えない余計な画面が途中にあらわれる。SFXにおいても中間窓を介してアクセスしたり、中間窓のフルテキストへのリンクもPDFファイルのひとつ前のページだったりするなど、3回、4回とクリックしないと論文本体にたどり着けない。そこで今回のシステムではワンクリックアクセスを目指し、SFXの中間窓に現れるリンクボタンを検索結果に直接表示させる「インラインSFX」を実装することでワンクリックアクセスを実現した。

データベース一覧機能の改善

筑波大学附属図書館が提供している情報資源の数は200を越える。2006年システムではこれらを専門分野ごとに分類し、2次元平面上で一覧できるようにしていた。このデータベース一覧機能が2006年システムの最大の特徴であり、トップページの全面積のうち8割を占めるほどであった。このようにデータベース一覧を前面に押し出した理由は資料の提供が図書館サービスの基本という考えからである。この狙いはある程度成功をおさめ、「情報資源を提供する図書館システム」として利用者に浸透した。今回もシステムの継続性とい

う意味からトップページに配置した。しかし、今回は 2 次元平面に展開するのではなく線形のリストにした。この変更により、トップページに占める面積は小さくなるものの、上から下に順番に見るだけで全てのデータベースがチェックできるようになり、平面からデータベースを探すより視認性は上がるはずである。さらに、今回はマイリスト機能を実装し、個人ごとにデータベースリストを作成できるようにした。

ウィジェット環境の導入

一つのシステムを 4 年もの間使い続けると、ここを変えたい、あれを追加したいという要求がどうしても出てくる。ほとんどのシステムはそのような変更を想定していないので、無理やり機能を追加することになる。その結果、導入時にせっかくとったバランスが崩れ、使いにくいシステムとなる。そこで今回はウィジェット環境を導入することでシステムの変更を最初から想定し、機能の追加や変更が簡単に行えるシステムにした。ウィジェットとは別名ガジェットとも言い、機能を部品化したものである。代表的なシステムに iGoogle がある。ウィジェット環境を導入することで、図書館員がシステムを簡単に変更できるようになる。また、利用者も個人環境をカスタマイズできる。さらに、ウィジェットを新たに開発することで図書館員と利用者が一緒にシステムを育てることも可能である。

わかりやすいデザイン

あるウェブサイトをみたとき、そのインタフェースデザインから利用者が受け取る印象や情報の総体をインタフェースのメッセージ性という。わかりやすいデザインとは、インタフェースのメッセージ性が明確かつ正確なことで、たとえば、その図書館のサイトをみたとき、いくつかのサービスから成り立っているか、そのサービスはどのようなものかが明確かつ正確に伝わる場合、わかりやすいデザインといってよい。Amazon, Yahoo, Google などはメッセージ性が明確で、マニュアルなしに使うことができる。今回は 2006 年システムの「何をすればよいのかわからない」システムにならないよう、デザインには相当時間をかけた。しかしながら、デザインはやればやるほどその難しさがわかってきた。メッセージ性が明確かつ正確なデザインにいきつくまでにはさらに多くの時間を費やさなければならぬだろう。一つ言えるのは細部のデザインが全体に大きく影響を及ぼすということである。デザインで最も重要なことはバランスである。

3. おわりに

2010 年システムは 2006 年システムが稼働開始した直後からその方向性や設計について議論を重ねてきた。2007 年度は館内で検討委員会を設置し、1 年をかけて企画書をまとめた。その結果、筑波大学附属図書館の目指す方向は「知識創造型図書館」であるという合意に達した。2008 年度は大学本部から予算に関するヒアリングが実施されたが、企画書のおかげで経費が必要な理由を明確に説明することができ、予算の削減はまぬがれた。2009 年度は仕様策定および導入作業を館内一体となって進めてきた。この 4 年間の議論が正しかったのかどうか、もうすぐ答がでる。



図 1 : 2006 年システム



図 2 : 2010 年システム (2010 年 2 月 3 日時点のデザイン (原稿執筆時))